
国際沿岸防災ワークショップセッションプログラム(高潮・高波)
参加者による被災地港湾の調査が行われました。

7月28日(火)から30日(木)にかけて、国際沿岸防災ワークショップに参加していた海外の研究者らによる、東日本大震災で被災した港湾施設等の現地調査が行われました。このワークショップは、2004年インド洋津波を契機に、世界各地における沿岸域の災害を低減するため、知識の共有と国際協力の推進を目的として、国土交通省港湾局などが開催しているものです。

近年、地球の気候変動に伴う海面上昇や、台風の巨大化によって沿岸域における高潮・高波災害のリスクが高まっていることから、27日(月)に東京で第14回国際沿岸防災ワークショップが開催され、災害からの復旧・復興、高潮に関する最近の研究について議論が交わされました。今回の現地調査は、3日間で仙台空港、仙台塩釜港、気仙沼港、大船渡港、釜石港、宮古港等を視察するもので、ワークショップで講演された米国など海外からの技術者・研究者4名と、京都大学名誉教授の高山知司先生、港湾空港技術研究所の高橋重雄理事長ほか計8名が参加されました。

調査では、被災地の復旧・復興の状況をご覧になりながら当局職員の説明を聞かれ、特に仙台塩釜港や、仙台空港の復旧の早さに驚かれていました。また、被災に対する応急復旧と、その後の本格復旧へ移行するプロセスについても、非常にスムーズに行われているとの感想を述べられていました。



▲仙台空港



▲仙台塩釜港仙台港区
高砂コンテナターミナル管理棟屋上



▲釜石港湾口防波堤



▲釜石港湾口防波堤(南堤)上にて撮影
(左から、港湾空港技術研究所高橋理事長、
Mr. David J. Leach、Ms. Roselle E. Henn、
Dr. Jeffrey A. Melby、Dr. Eric C. Cruz)